

北海道日高地方における軽種馬生産地域の構造

田 林 明

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| I はしがき | III-2 日高地方における軽種馬生産者（牧場）の諸類型 |
| II 日高地方における軽種馬生産の発展 | IV 日高地方における軽種馬生産を核とした地域の構造 |
| II-1 日本における軽種馬生産の分布 | V むすびー軽種馬生産地域における持続的発展の可能性ー |
| II-2 日高地方における軽種馬生産の推移 | |
| III 日高地方における軽種馬生産の性格 | |
| III-1 日高地方における軽種馬の生産環境 | |

キーワード：日高地方，軽種馬，持続的発展，地域の構造，高度経済成長

I は し が き

1960年代からの先進工業国における農業の機械化・化学化・合理化の進展にともない，農業生産力は向上したが，環境汚染に象徴されるように様々な問題が生じてきた¹⁾。さらに典型的な例が北アメリカの大平原にみられるように，農業の省力化と経営規模の拡大にともない，農場数と農村人口が減少し，それが極端な場合には過疎化によって地域社会の崩壊にまでつながっていった²⁾。日本の場合も山村や大都市から遠隔の地域では，過疎化が急速に進んだが，大部分の農業地域では兼業化が浸透し，多くの農業労働力が都市的産業に吸収されていった³⁾。農民の経済活動が多様化した結果，共同体的基盤に基づく伝統的な農村社会は変質していった。従来のように比較的等質な農民が共同で農村の環境や経済基盤，社会・経済的組織を維持してきた状況はみられなくなった。そして，農村においても個人を主体とする都市的な生活が中心となってきた。

このような状況のもとで，それぞれの農村がおかれた場所の環境資源（特に自然環境）を十分に活用し，しかもその環境と農村生活の質を悪化させないようにしながら，高い生産性をいかに維持していくかということが，しだいに困難になってきた。そこで，農村の持続的発展の可能性を探ることが，現代の農業・農村地理学の主要な課題の一つになってきた⁴⁾。すなわち，どのような農村において「現在および将来とも社会的・経済的に安定しており，安全で質の高い生活を享受でき，それぞれの構成員がその農村コミュニティの一員としての意義をみだし，積極的に発展させていこうとする意欲がみられる」のか，そのためにはどのような地域の条件が必要なかを明らかにすることに強い関心が向けられるようになっている⁵⁾。

これまで多くの研究者が持続的な農業・農村について取り扱ってきたが，概念規定や理念，研究方法論的枠組みの構築など抽象的な議論に終始するものが目立っている⁶⁾。このような演繹的研究に

加えて、現実の農村における実態調査を踏まえて持続的農業・農村の性格とその存立条件を探るといふ帰納的な研究も不可欠であろう。ここでは後者の視点から、農村の持続的発展の可能性を検討する。研究対象として北海道日高地方の軽種馬生産地域を取り上げる。

競馬の歴史は長く、紀元前15世紀のトロイの時代にまでさかのぼるとされる⁷⁾。日本に西洋式の競馬が最初に導入されたのは1861年（文久3）のことであり、横浜に居住していたイギリス人の貿易業者の手によるものであった⁸⁾。その後競馬は大きく発展し、現在では日本でも最も人気のあるレクリエーションの一つとなっている。日本中央競馬会によると、1995年には中央競馬と地方競馬を含めて1,600万人が競馬場に行き、4.6兆円の売り上げがあった。現在では日本における軽種馬の約80%が日高地方で生産されている。日高地方は1995年の国勢調査によると、面積は4,812km²であり和歌山県よりもやや大きい、その人口は89,936であり、1km²当たりの人口は18.7にすぎない。

藩政期の日高地方には沙流と新冠、染退、静内、三石、浦河、油駒の7つの場所が設けられており、当時は昆布などの海産物が主な産物であった。農業としては、アイヌによる自給用の粟や稗の栽培、各場所の会所周辺での自給用の野菜栽培などが行われていたにすぎなかった。1870年（明治3）に「東蝦夷地御親料規則」施行後、彦根藩士や九州の農民が入植したが、開墾は困難を極めた。1882・83年（明治15・16）に神戸からの赤心社が入植したころから、開墾は急速に進んだ。馬は文化年間（1804-08）に場所間の交通手段として本州から持ち込まれたが、1857年（安政4）には浦河に幕府直轄の馬牧が設置された。また、1872年（明治5）には新冠牧場が開かれ、これが1884年（明治17）に御料牧場となり馬の改良が行われた。さらに日清・日露戦争後1907年（明治40）に軍馬の改良と馬産振興のために日高種馬牧場が開設された。これらが、今日の馬産地としての日高地方の発展の基礎となった⁹⁾。

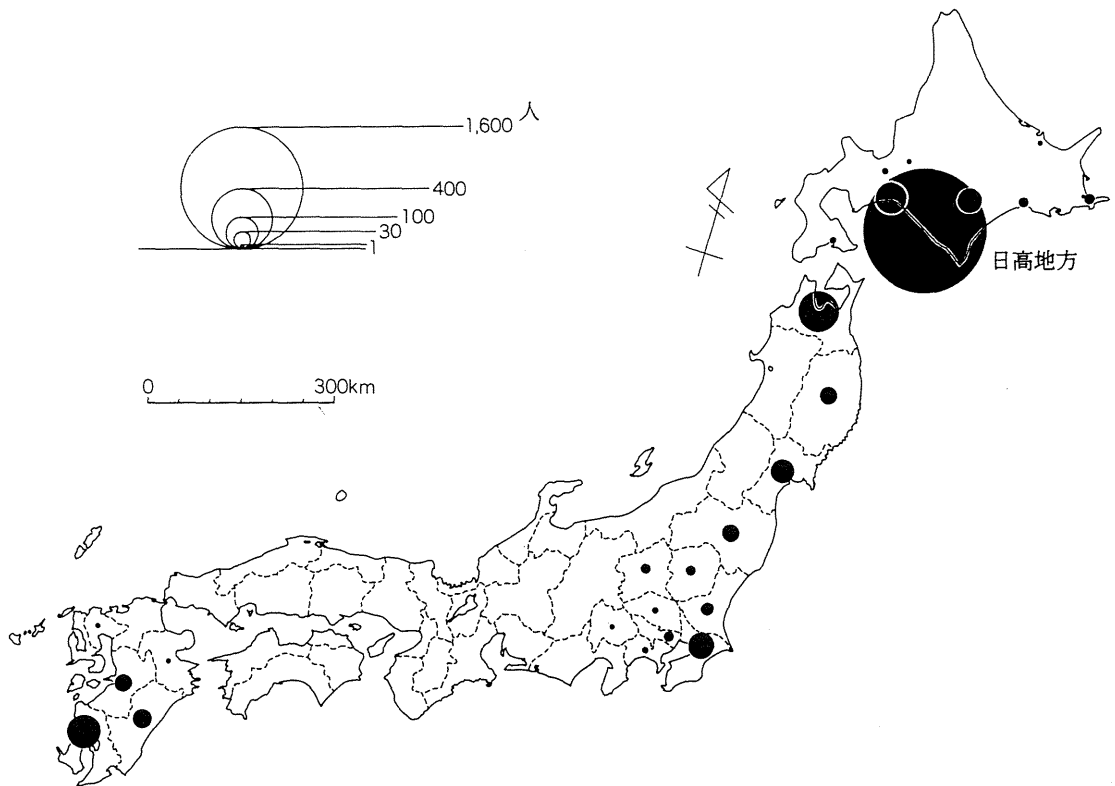
日高地方の軽種馬生産については、新藤賢一と岩崎徹の一連の研究があり、それらでは軽種馬生産の歴史的発展過程と地域類型¹⁰⁾、土地利用と農業経営の変化¹¹⁾、種牡馬の所有組織の実態¹²⁾、生産された軽種馬育成と取引の実態や問題点¹³⁾、¹⁴⁾、さらに近年の生産過剰の問題¹⁵⁾などが詳細に分析されている。また増井好男も生産馬の庭先取引と市場取引を対比させながらその問題点を探り、改善策を提案している¹⁶⁾。これらは極めて詳細に日高地方の軽種馬生産と流通の構造、さらにそれらの問題点を明らかにした労作である。しかし、このような経済的メカニズムに主眼をおく研究に加えて、日高地方において経済的・社会的・文化的に重要な地位を占める軽種馬生産を中心として、どのように地域が構成され、どのような地域の性格が生み出されているかを解明するという地域論的な分析視点も意義のあることであろう。すでに新藤賢一が続新冠町史の中で¹⁷⁾、このような視点から新冠町の軽種馬生産をめぐる経済・社会・文化など多様な側面について記述・分析しているが、さらにこれらを系統的に整理する必要があるように思える。この報告は、このような立場にたって日高地方の軽種馬生産の発展と地域差、軽種馬生産をめぐる地域システム、そして軽種馬生産を核とした地域の持続的発展の可能性を、現地での聞き取りを主体にし、新藤らの研究を参考にして、予備的に分析したものである。

Ⅱ 日高地方における軽種馬生産の発展

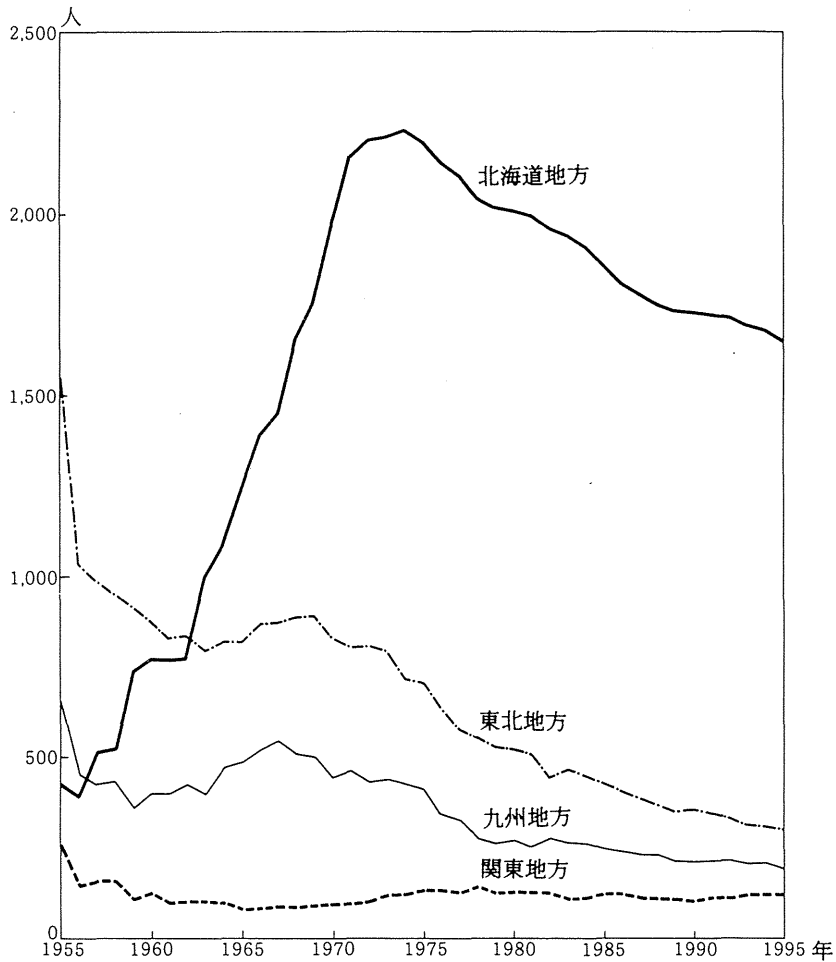
Ⅱ-1 日本における軽種馬生産の分布

日本軽種馬協会の1996年1月1日現在の会員名簿によると、全国の会員は2,288人を数える。これらは日本における軽種馬生産者もしくは生産法人とみなすことができる。第1図はその都府県および支庁別の分布を示したものである。これによると、軽種馬生産者数は1,652と北海道に最も多く、これは全体の72.2%にあたる。日高地方のみで1,459人の生産者がおり、これは全体の63.8%にあたる。北海道に次ぐのが青森県の172人、さらに鹿児島島の124人、千葉県の67人、宮城県との58人となる。これによると関東地方以東の東日本の太平洋側と、九州地方の中南部に分布が集中していることが明確であり、いずれも林地や草地などの粗放的な土地利用が残存している地域である。

19世紀の終わり頃にはすでに北海道は軍馬の生産地として知られていたが、軽種馬の生産については関東地方や東北地方が中心であった。特に千葉県の下総御料牧場と岩手県の岩井農場は、日本の軽種馬生産の核であった。北海道での軽種馬生産が実際に始まったのは第2次世界大戦後であるが、1950年代には依然として東北地方や九州地方の生産者数が、北海道の生産者数を上回っていた（第2図）。ところが、1960年代の高度経済成長期に北海道の生産者は急増し、1950年代後半から1960年代



第1図 日本軽種馬協会会員の分布（1996年）
日本軽種馬協会会員名簿により作成



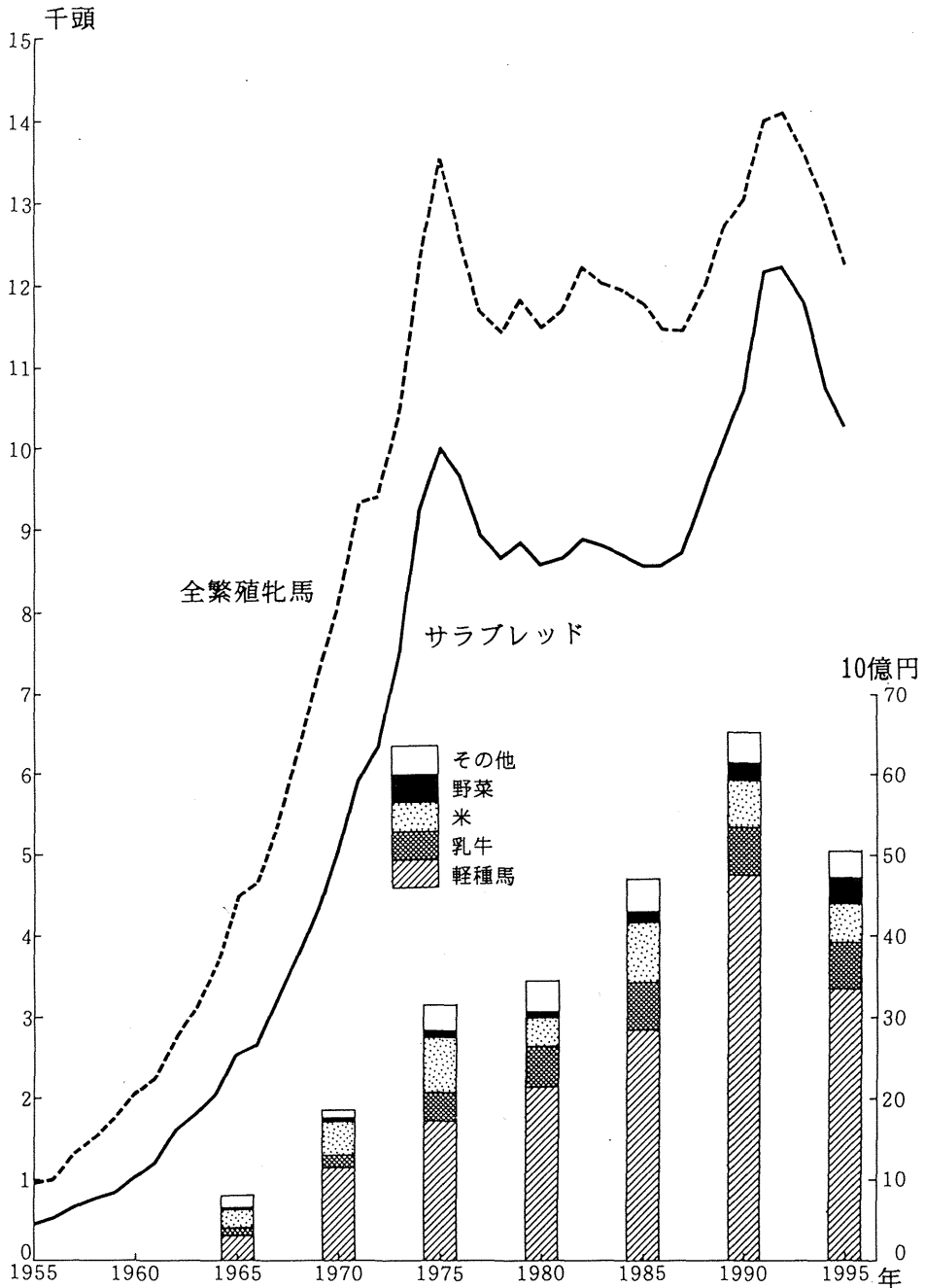
第2図 地方別日本軽種馬協会会員の推移
1995年日本軽種馬生産統計により作成

初めにかけて生産者数が減少した他地域と大きな差がついてしまった。1970年代中頃から生産者は、いずれの地方においても漸減しているが、北海道の優位性に変化はなかった。

II-2 日高地方における軽種馬生産の推移

日高地方の軽種馬生産は第2次世界大戦後急速に拡大した。1955年の全国の軽種馬生産者は2,526人であったが、日高地方の生産者数は354人にすぎず、全体のわずか14%にすぎなかった。それが1960年代から急速に増加し、1965年には1,065人、1970年には1,664人、そしてピークに達した1974年には1,993人となり、全国に占める割合はそれぞれ40.6%と48.9%、53.7%となった。1970年代後半からは生産者は減少し始め、1995年には1974年のおよそ4分の3に当たる1,460人になった。しかし、日本の他の地方では減少率がさらに大きかったために、日高地方の生産者の全国的な地位はかえって高くなってしまった。

さらに日高地方の繁殖牝馬飼養頭数の推移をみると（第3図），1955年には527頭であったものが，1960年代と1970年代に急速に増加し，1975年に最初のピークを迎え，繁殖牝馬飼養頭数は13,096頭に達した．その後1970年代後半には一時的に減少し，そして1980年代後半まで停滞したが，1990年代になって再び急増し1992年には第2のピークに達した．このようにしてみると，1950年代以降の繁殖牝



第3図 日高地方における繁殖牝馬飼養頭数と農業粗生産額構成の推移
日高軽種馬農業協同組合理業成績資料および農業生産所得統計により作成

馬頭数の推移は、日本の経済状況をよく反映していることがわかり、それはまた日本の競馬の盛衰とも一致している。新藤らは第2次世界大戦直後から1977年までの日高地方の軽種馬生産の推移を、1948年から1964年までの発展期と、1965年から1973年までの最盛期、そして1974年以降の過剰期に整理しているが¹⁸⁾、これにその後の1986年から1992年までのバブル経済期、そして1993年以降の不況期を追加することができる。

第2次世界大戦後の日本では1946年から組織的な競馬が再会されるが、1954年には日本中央競馬会が設立され、入場人員や出走頭数からみて1961年頃によく第2次世界大戦前の水準まで回復した。この頃から経済の高度成長が始まり、後の競馬ブームの端緒となった。日高地方では1950年頃までは稲と麦類・豆類・雑穀、そして馬鈴薯などの生産が中心であり、主穀作物が重視されたが、1960年頃には水稻と小豆、工芸作物の生産が増加し、雑穀類が減少していった。そしてこの頃から軽種馬生産が大きく伸び、1965年の農業粗生産額構成をみると、軽種馬が米を追い越して第1位になっている。

1965年以降は高度経済成長にもなって競馬ブームがおき、軽種馬の需要が急増した。産馬価格は大幅に上昇した。日高地方はその自然条件から一般的に大規模な耕種農業には適さず、しかも折からの乳価の低迷によって酪農の経営環境が厳しくなったことや、稲の生産調整が始まったこともあって、伝統的な主穀作物生産や酪農を行う多くの農家が、軽種馬生産を開始するようになった。1970年の農業粗生産額構成によると、軽種馬は62.6%を占め、米の21.3%、酪農の8.3%を大きく引き離し、軽種馬生産が日高地方の農業において中心的な地位を占めるようになった。馬の種類をみると、サラブレッド種の割合が年々大きくなり、1955年には48.5%がサラブレッド種で、残りがアングロアラブ種であったものが、1970年代には70%がサラブレッド種によって占められるようになった。

しかし、1973年のオイルショックを契機に日本の経済は停滞するようになり、それにもない競馬ブームにもかげりがみられるようになった。中央競馬でも1974年頃から競争日数や回数、出走頭数は頭うちとなり、売上金額も実質的には減少するようになった。軽種馬の需要が減少するにつれて産馬価格が低下したにもかかわらず、1960年代を通じて軽種馬生産に特化するようになった日高地方の多くの農家では、軽種馬経営を他の農業に転換することが困難となり、軽種馬の生産過剰が大きな問題となった。さらに、輸入馬の増大がこの傾向に拍車をかけた。軽種馬生産の低迷は1986年頃まで続くが、1990年前後にはいわゆるバブル経済によって一時的に好景気となった。一般の軽種馬生産農家も農業協同組合からの多くの資金を借り、種付けや繁殖牝馬の購入、そして農場の施設などに投資するようになった。しかし、1992年以降再び深刻な不況に陥ることになった。多くの軽種馬生産農家は莫大な負債をかかえ、しかも他の農業に転換するめどもたたないという状況である。農業粗生産額に占める軽種馬の割合が70%前後という数値からわかるように、軽種馬主体の農業構造が確立してしまっており、さらに農業のみならず地域の経済自体も軽種馬生産を基本とする地域システムが確立してしまつた日高地方では、極めて深刻な状況におちいつている。

Ⅲ 日高地方における軽種馬生産の性格

Ⅲ-1 日高地方における軽種馬の生産環境

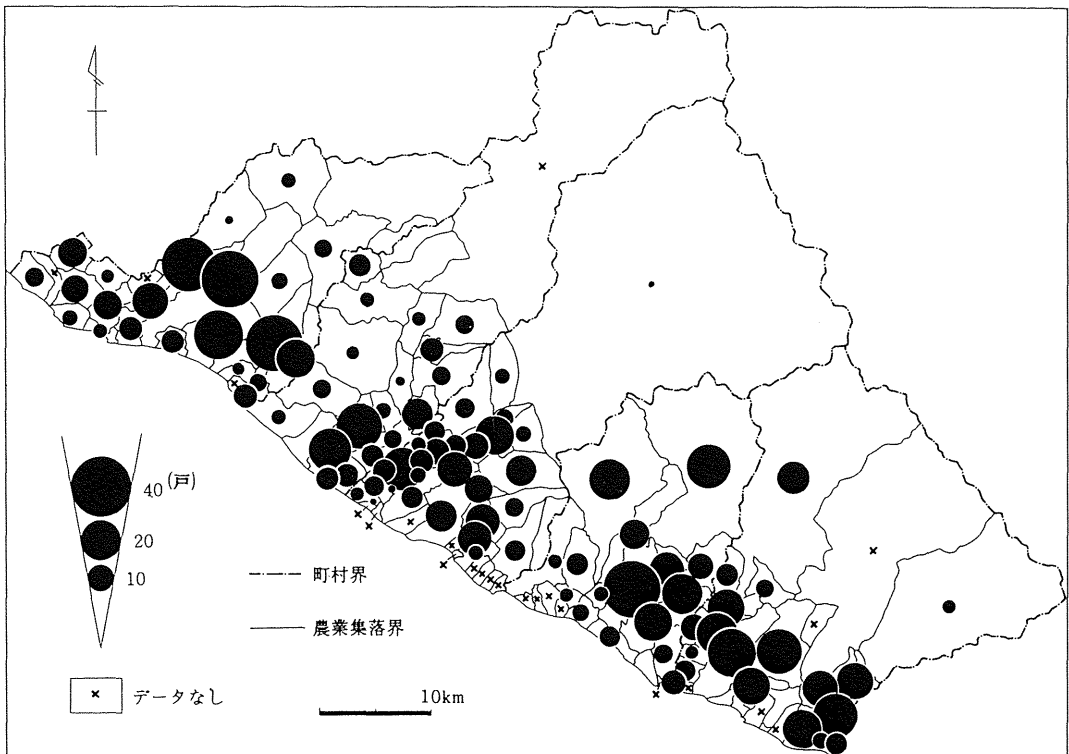
日高地方は日高山脈の南西斜面に広がっており、北西から南東にかけて沙流、門別、厚別、新冠、静内、三石、幌舞、元浦、日高幌別、様似、幌満、ニカンベツ、歌別などをはじめ多くの河川が、北東から南西に山地を侵食しながら並行に流れている（写真1）。山地や丘陵地が大部分を占めることもあって、耕地面積は総土地面積である481,180haのわずか8.4%にあたる40,600haにすぎず、しかもその76.8%が牧草地となっている。河川ぞいの狭小な沖積平野と、海岸線にそって発達した海岸段丘においても、まとまった平坦地が少なく、起伏があったり傾斜しているところが多い（写真2）。気候条件を新冠町の例でみると、1982年から1992年までの平均値で年間平均気温は7.0℃であり、最暖月である8月の平均気温が20.7℃、最寒月の平均気温が-6.9℃である。年間降水量は1,197mmで、冬に降水量が少ないほかはだいたい平均している。6月から8月にかけて霧におおわれることが多く、そのために日照時間が少なく、最高気温も25℃を越えず過ぎやすい。また、冬季でも積雪は10-20cm程度と少なく、根雪期間も50日程度である¹⁹⁾。このように、日高地方の気候条件は北海道としては比較的温和である。さらに、この地方では火山放出物に由来する土壤が広く分布し、中でも黒ボク土が約60%を占めている。これは石灰質に富むことから、強靱な馬の骨格と脚部をつくるのに都合がよい²⁰⁾。地形や気候、そして土壤などの自然条件からすると、日高地方は耕種農業よりも畜産に適している。

歴史的には、1857年（安政5）に元浦河に幕府直轄の馬牧が設置され、当初は50頭余りであったものが、1868年には500頭に増加した。この年にこの馬牧が廃止され、馬は民間に委託された²¹⁾。1872年（明治5）に開拓使黒田清隆によって現在の門別町と新冠町、静内町にわたる面積約7万haにおよぶ牧場が開設され、これに1877年に新冠牧馬場という名称がつけられた。その後、牧場の規模が3.8万haに縮小され、1888年（明治21）に新冠御料牧場となり、これが1947年に宮内省の廃止に伴い農林省新冠種畜牧場となった²²⁾。また、日露戦争により国内産馬の資質が劣ることを認識した明治政府は内閣直轄の馬政局を設置し、1907年（明治40）に現在の浦河町西舎地区に日高種馬牧場が創設され、主に軍馬の資質の向上のために種馬の改良繁殖が行われた²³⁾。この日高種馬牧場は、1947年に農林省の種畜牧場になった。この2大牧場による馬生産のための技術指導は、日高地方が軽種馬生産地域として発展した大きな要因となった。

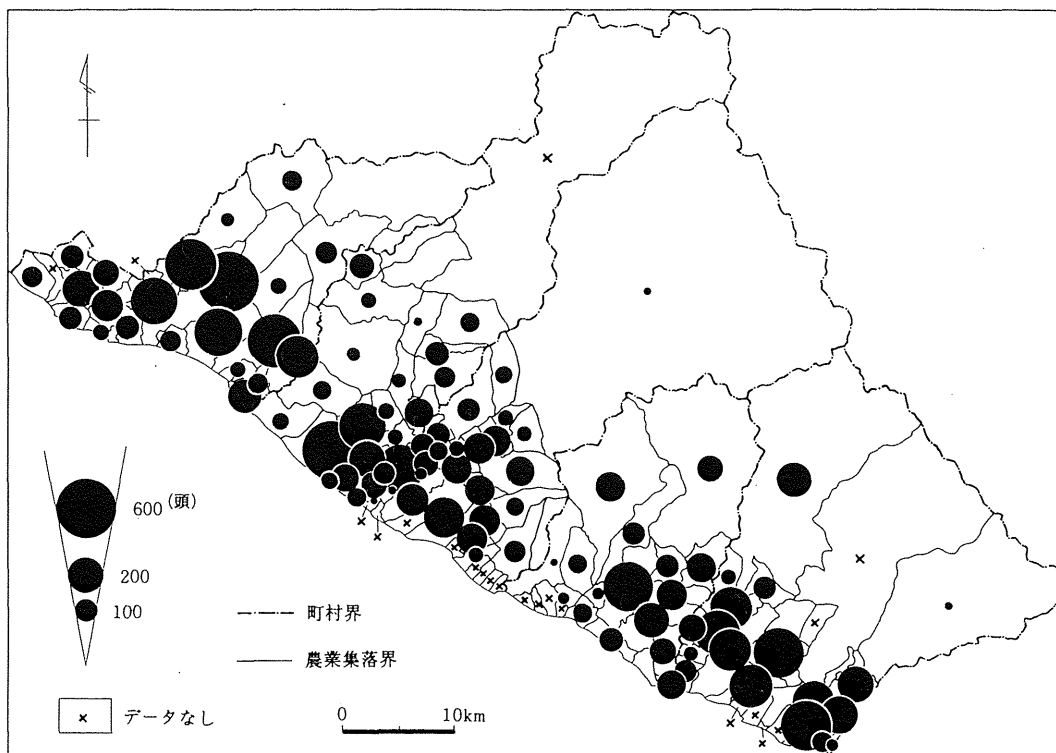
さらにこの地域では、すでに述べたように河川流域の水稲作にとっても、洪積台地や丘陵地、海岸段丘上の畑作にとっても、まとまった広い農地が少なく、また、農家の経営規模も小さかった。1960年代からの小麦や大豆などの輸入によって、一般畑作物は減少し、さらに1970年代からの米の生産調整によって水稲作も転作を余儀なくされた。しかも、乳価は低迷し、酪農も必ずしも有利ではなかった。また、このほかのみるべき産業も日高地方にはなかった。また、北海道の他の地域と同様に、一攫千金を夢みる投機的な気質が強いという、開拓期以来の気質があった。このようなことから、草地農業では比較的集約的で、危険性はあるが、成功すれば高所得をあてにできる軽種馬生産が急速に広

がった。

現在の軽種馬生産の中心である門別・新冠・静内・三石・浦河の5町における1995年の軽種馬飼養農家の分布をみると（第4図），まず海岸沿いに分布が集中していることに気づく。これは大きな河川の下流ぞいの沖積平野や海岸段丘面が軽種馬の主要生産地であることや，海岸に近いところでは気候が温暖で積雪量が少ないこと，海からの潮風によって病虫害の発生が比較的少ないことなどが有利な条件となっている。また，国道235号線というこの地方の幹線道路に近く，馬の買い付けのために客が来やすいことも関係している。さらに，大きく3つの分布のかたまりがみられる。それらは，西から門別地域と新冠・静内地域，そして浦河・三石地域である。門別地域では沙流川と厚別川の流域，新冠・静内地域では新冠川と静内川の流域，そして浦河・三石地域では日高幌別川と元浦川，鳧舞川，三石川などの主要河川ぞいの農業集落において，軽種馬生産が盛んである。また，軽種馬農家率は静内町と浦河町の市街地周辺の農業集落で特に高く，また農家1戸当たり軽種馬飼養頭数では，新冠・静内町と門別町で特に高い値がみられる。軽種馬の分布を示した第5図も，基本的には軽種馬飼養農家の分布と同様の傾向がみられるが，より特定の農業集落に分布が集中する傾向にある。浦河・三石地域の山間の集落では軽種馬飼養農家が比較的多いにもかかわらず，飼養頭数は少ない。



第4図 日高地方における軽種馬飼養農家の分布（1995年）
農業センサスにより作成



第5図 日高地方における軽種馬の分布（1995年）
農業センサスにより作成

Ⅲ-2 日高地方における軽種馬生産者（牧場）の諸類型

すでに述べたように、日高地方には1,459の軽種馬生産者（牧場）が存在するが、その経営形態は多様である。そこで、ここではその生産内容から大まかに3つの類型に分類し、それぞれの特徴を検討することにしよう。まず、第1の類型は、種馬場である。これは主に優秀な種馬を所有し育成するものであり、日高軽種馬農業協同組合による4つの牧場と日本軽種馬協会の1つの牧場のほかに、民間の会社組織や個人経営のものが25ほどある（写真4）。民間のものも規模が大きく経営基盤もしっかりしたものが多い。

第2の類型は育成牧場であり、これは軽種馬の生産に加えて、基本的なトレーニングを行うものであり、そのための屋外あるいは屋内のトレーニング施設を備えている（写真5）。従来は、中央競馬の場合茨城県的美保トレーニングセンターや滋賀県の栗東トレーニングセンターにおいて、調教師によって行われた仕事が、近年ではトレーニングセンターでのスペースが限られていることもあって、基礎的な段階までは生産地の牧場で行われるようになってきている。このような生産者は日高地方では約130を数え、その数は増加しつつある。しかし、日本では調教技術をもつ者が少なく、育成牧場のかなりはイギリス、アイルランド、アメリカ合衆国、オーストラリア、ニュージーランドなどからの調教技術者を雇用している。これらの技術者は、自国で10年以上の経験をもつ者に限られ、オーストラリア人やニュージーランド人はワーキングホリデー制度を活用するが、そのほかは就労ビザを取得し

て来日している。通常、牧場内に雇用主が宿舎を準備している。日高地方だけでも100～200人ほどの外国人調教技術者がいるとされる。

第3の類型は繁殖牝馬をもつ生産牧場であり、残りの約1,300がこれにあてはまる。この類型が日高地方の軽種馬牧場の大部分を占める。これらの生産牧場はさらに3つに細分することができる。生産牧場の約半分がサラブレッド生産に特化した、10頭以上の繁殖牝馬を飼養する中規模から大規模の生産者である（写真6）。さらに約45%の生産牧場は、サラブレッド種を主体としアングロアラブ種の繁殖牝馬も飼養する小規模から中規模の経営を行っている。また、この類型の牧場のうち小規模なものは、野菜栽培や稲作を軽種馬生産と組み合わせている。そして、残りの約5%は繁殖牝馬の飼養頭数がおおよそ5頭以下の小規模なもので、アングロアラブ種の繁殖牝馬の飼養を主体とし、これも稲作などの農業も同時に行っている（写真7）。

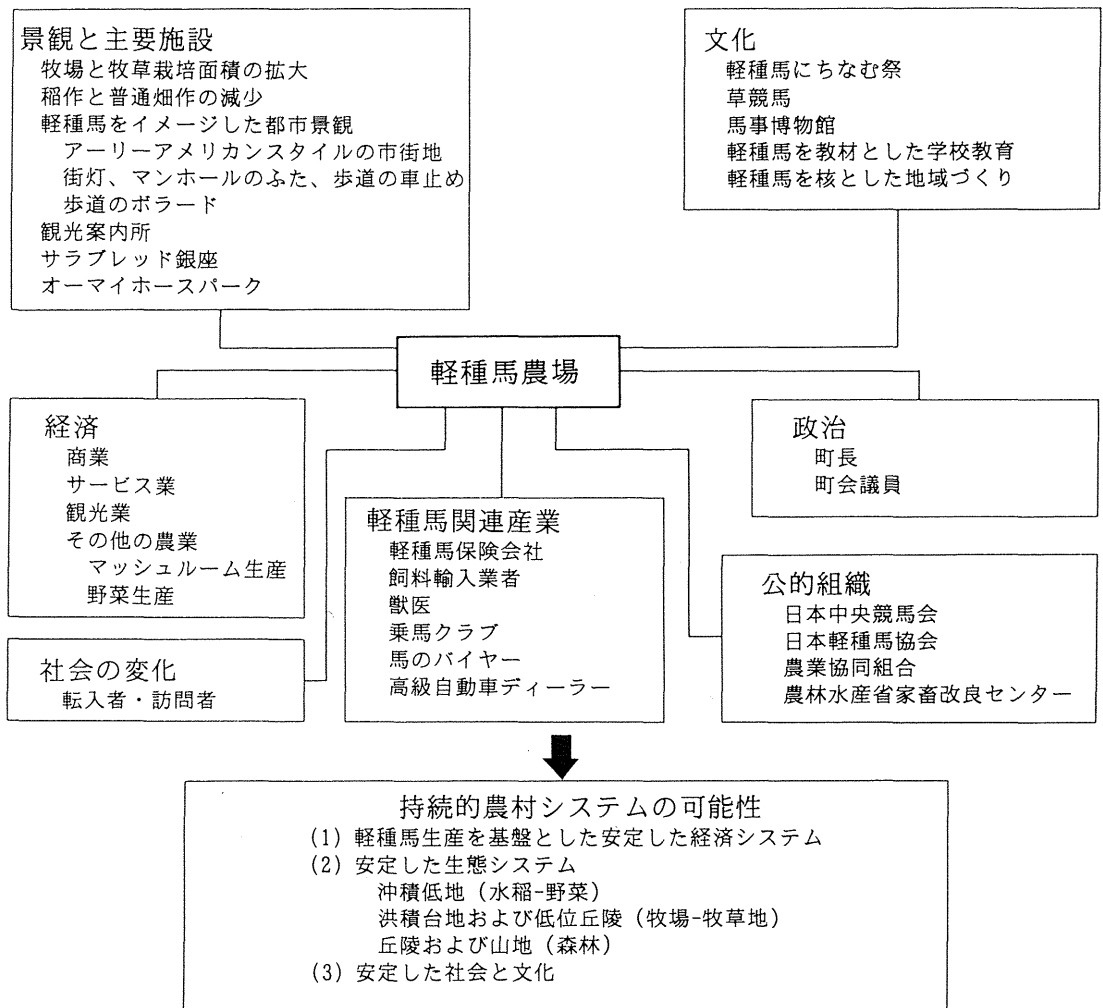
現在では、サラブレッド種に特化した大規模や中規模の生産牧場のうちのかなりが、経営不振に陥っている。むしろアングロアラブ種の生産を行う小規模農場の方が、安定した経営を行っている。1960年代から1970年代前半の高度成長期以来、スピードが早くスタイルのよいサラブレッド種への指向が年々強まってきたが、良質のサラブレッド種を生産するには、高額の種類付け費用が不可欠であり、そのために数百万から1千万円以上の費用が必要である。さらにサラブレッド種の場合は、アングロアラブ種と異なって、高額の種類付け費用を支払っても、必ずしも高品質の産馬を得られるとは限らないという危険性をはらんでいる。また、病気になりやすく、育成に手間がかかるという欠点もある。1980年代終わりから1990年代の初めにかけてのバブル経済期には、質の良いサラブレッド種に高額な値段がつけられ全体として需要も増加したが、その後の不況によって1970年代から顕在化した生産過剰状態がさらに深刻化した。産馬価格が低下し、さらに需要の減少により販売できない場合もでてきた。1996年の聞き取りでは、6割程度の取引成立率にすぎないとのことであった。さらに、外国産馬の輸入の増加が、生産過剰と価格低下に拍車をかけた。中央競馬ではアングロアラブ種のレースがなくなり、地方競馬のみにそのレースが限られているが、投資費用が少なくすみ、丈夫で育てやすいアングロアラブ種を主体とした小規模経営の方が、全体的に収益は少ないが不況期には安定しているのである。

軽種馬生産牧場の多くは、地元の農業協同組合から融資をうけて、種付けや施設整備、繁殖牝馬の購入のためなどの経営資金にしている。農業協同組合では潤沢な資金を背景にバブル経済期には、一般の銀行などと比較すると緩やかな条件で、15～20頭規模の生産牧場に1億2千万円までの融資を行っていた。しかし、これらの貸付が現在では回収困難になっているものが多く、いわゆる不良債権化している。地元のある農業協同組合での聞き取りによると、417の組合員の軽種馬生産者のうち、経営好調で負債がないか、負債を返却できる見込みのあるものはわずか3割を占めるにすぎない。これらは、頭数を削減し、優れた血統で資質の良い繁殖牝馬の飼養に限定してきている技術の高い生産者である。経営が不振で負債が増加しつつある生産者は5割を占め、さらに実質的に経営が破綻している生産者も2割を占めている。経営不振の生産者はよい種付けをする資金的余裕がなく、結果として産馬の質が低下し、それが売れないという悪循環に陥っている。

IV 日高地方における軽種馬生産を核とした地域の構造

日高地方における軽種馬生産は、地域経済において極めて重要な役割を果たしており、さらに地域社会の核になっているといっても過言ではない。農林水産省統計情報部の農業生産所得統計によると、1995年の総農業粗生産額の66.2%が軽種馬販売によるものであった。軽種馬販売の70%以上は、市場取引ではなく庭先販売によるものであり、現実には軽種馬生産額はさらに多くなると考えられる。仮に農業生産所得統計の数値を用いるとしても、第2次・第3次産業を含めて日高地方の全生産額の3分の1は軽種馬生産によるものである。日高地方では経済的機会が限られているため、多くの人々が軽種馬生産とそれに直接・間接的に関係する産業に従事している。第6図に示すように、軽種馬生産は地域の景観や経済、社会、政治、文化などと深く関わっているといえよう。

景観的には、1995年には日高地方の総耕地面積の76.8%に当たる31,200haが牧草地によって占めら



第6図 日高地方における軽種馬生産を核とした地域システム
聞き取りにより作成

れるようになった。これに対して、水稻と豆類や麦類、そして馬鈴薯、てんさいなどの普通畑作物の栽培面積は減少している。都市景観にも軽種馬生産地の特徴がみられる。例えば、静内町の中心商店街であるみゆき通りは、「市街地再開発事業」や「店舗協同化事業」、「商店街近代化事業」、そして「街路事業」という4つの事業を組み合わせて、商店街再開発事業を実現した。みゆき通りは、牧歌の町のイメージに合わせてアーリー・アメリカン・スタイル（開拓当初のアメリカ西部の建物）につくりかえられた²⁴⁾（写真9）。市街地のマンホールのふたや歩道の車止、歩道と車道を分けるボラード（写真10）などいたるところに、馬の町を感じさせる工夫がされている。また、日高地方の各町村では街灯に馬のデザインを取り入れている。静内町では馬と桜、三石町では馬と昆布、浦河町では馬（写真11）といった具合である。この街灯は一灯につき約100万円の建築経費がかかるが、約50%の補助が北海道開発庁から出され、静内町では町内の主要道路ぞいに375灯を設置する予定で事業を進めている。観光客用の案内所もいくつか設けられており、最も代表的なものは静内町にある日本軽種馬協会の「競走馬のふるさと案内所」である（写真8）。また、同じ静内町の二十間桜並木には「オーマイ・ホース・パーク」がつくられ、ここで競馬ファンのために軽種馬牧場の案内を行っている。また、新冠町では新冠川と並行に東西に走る道道209号線ぞいに多くの軽種馬牧場が立地しているが、ここをサラブレッド銀座とよんで、看板や休憩所などが整備されている。浦河町では1998年度完成をめざして、軽種馬を中心テーマとしたレクリエーション・研修施設である「優駿の里」を建設中である。

すでに述べたように経済的にも、軽種馬生産は大きな影響を与えている。特に観光業は、軽種馬牧場に訪れる競馬ファンによって支えられている。馬糞を用いたマッシュルーム生産や、野菜栽培にも近年力が入られるようになってきた。軽種馬に直接関係する産業に従事する人々も多い。軽種馬輸送業者、軽種馬保険会社、飼料輸入会社、飼料や牧柵、その他資材を扱う馬の総合商社、獣医、乗馬クラブなど日高地方独特な産業がある。また、日高地方では高級車を取り扱う自動車ディーラーが多いとされる。また、観光客や軽種馬取引関係の人々、さらに牧場で働くことを希望する若者が全国から集まってくる。さらに外国からの調教技術者たちが日高地方の社会を変化させている。

文化的にも軽種馬にちなむ祭や催物の各町村で行われている。静内町では「オーマイ・ホース・フェスティバル」が9月の第2日曜日に行われ、初心者対象の馬術講習や障害物競争、ピヤガーデンなど乗馬に関係する行事を中心とした祭が行われる。浦河町では「シンザンフェスティバル」が1986年から始められ、毎年8月の第1土曜と日曜にかけて行われる。美人コンテスト、歌謡ステージ、伝統芸能大会、流鏝馬、クイズ、竹馬選手権など多彩な催しがある。浦河町では1996年8月に前の月に死亡したシンザンの追悼式が盛大に行われた。地元関係者や全国の競馬ファンが数百人もあつまり、この地域における軽種馬の重要性を象徴する行事であった（写真12）。新冠町では1971年から駒祭が毎年9月の最終日曜日に行われる。これは、草競馬を中心的とした行事である。門別町でも「とねっこカーニバル」が10月第1日曜日に行われる。そのほかに、浦河町には馬事資料館が、郷土博物館の敷地内に設けられている。また、すでに述べたような軽種馬をテーマにした地域開発や、郷土教育なども盛んである。

軽種馬生産は日本中央競馬会や日本軽種馬協会、日高軽種馬農業協同組合、そして各町を単位とした農業協同組合、農林水産省家畜改良センター新冠牧場、北海道日高支庁、各町役場など様々な公的機関や団体によって支えられている。そして、この地方の町長や町会議員などの政治家も、軽種馬関係者が多い。例えば、浦河町や静内町、そして新冠町の町長は軽種馬牧場関係者で、いずれも日高軽種馬農業協同組合の組合長もしくは副組合長の経験者である。

以上のように日高地方は、軽種馬生産を核とした地域形成が行われており、軽種馬産業の動向が地域の盛衰を左右するという状況になっている。

V むすび ー軽種馬生産地域における持続的発展の可能性ー

日高地方ではカナダなどで多くみられる単一産業資源依存都市（single-industry resource-based town）と同じように、社会自体が軽種馬生産に強く依存している。最大の問題は、この軽種馬生産が日本全体の経済に強く左右されることである。このことは、特に経済的な点で、日高地方の社会が不安定で非持続的であることを意味している。1960年代から1970年代初めにかけてと、1980年代後半から1990年にかけてのバブル経済期に、余りにも多くの農民が軽種馬生産を開始し、現在では全体のおよそ70%は経営不振に陥っている。彼らは投機的に軽種馬経営を行い、優良繁殖牝馬の購入や種付け、そして施設の整備などに過剰投資を行った。そして、不況となった現在では、その負債を償還することが困難になっている。

経営不振の軽種馬生産者はしだいに淘汰され、健全な経営の牧場が生き残ることは必然的であろう。それらは、堅実な経営を行い、優れた生産技術と調教技術をもった大規模あるいは中規模の牧場か、アングロアラブ種を主体とし、水稲作や野菜栽培を組み合わせる小規模な牧場であろう。後者の農場は沖積低地や洪積台地、そして丘陵地を利用するような複数の経営部門を組み合わせ、さらに馬糞などを有機肥料として活用するなどして、軽種馬生産とその他の農産物生産を結びつけている。しかしながら、現在の日高地方の軽種馬生産の姿勢は、自然環境の質を維持しながら、生産者の経済的・社会的利益を確保し、しかも現代社会にとって必要な農産物を供給し続けていくという、持続的発展の可能性を追求する状況とはかけ離れている。

持続的発展という立場から日高地方の軽種馬生産を改善するためには、現在の軽種馬生産者、特に経営状態の悪い牧場を減らし、軽種馬育成技術と調教技術を向上させ、生産者の短期的な視野に基づく投機的な経営姿勢を改める必要がある。また、現在では競馬の収益金の大部分が、酪農や肉牛肥育、養豚などの一般の畜産業振興に向けられているが、国内の軽種馬産業振興にも使用されるべきであろう。農林水産省は軽種馬生産を農業活動とはみなしていないために、軽種馬生産者は、他の農民のように、金利の低い制度資金を導入したり、農業補助金を得たりすることはほとんどない。

日高地方にとっては、軽種馬生産のみに依存する単一産業社会から、より多様な経済活動を基盤とした社会への移行に努力しなければならない。適切な土地利用計画もまた、経済活動と環境資源の保全を両立させるために不可欠である。例えば、沖積低地を水稲作に、洪積台地や低位丘陵を牧場や牧草地に、そして丘陵や山地を森林として利用するといった、それぞれの環境に適した利用を組み合わせ

せ、調和させていく必要がある。日高地方はその自然環境や歴史的背景、そしてすでに形成された社会・経済的システムからみて、日本でも最も軽種馬生産に適した地域であろう。さらに、生産者のみならず生産者以外の地域住民、そして様々な公的な機関が協力して、軽種馬を核とした地域の持続的発展の可能性を探っていく必要がある。

本研究を行うにあたって、日高軽種馬農業協同組合の六角健蔵管理部長と岡山武種畜課長をはじめとする皆様、日本軽種馬協会の松尾圭二調査部長、北海道農政部、農林水産省札幌統計情報事務所、北海道日高支庁、浦河町役場、三石町役場、静内町役場、新冠町役場、門別町役場、ひだか東農業協同組合、浦河町立郷土博物館、そして多くの軽種馬生産者の方々にお世話になった。現地調査と報告のとりまとめのために、平成8・9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「軽種馬牧場の立地と持続的農業に関する地域システム論的研究」、(代表者 斎藤功, 課題番号 08458024)と平成9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「持続的農村システム形成における女性の役割に関する地理学的研究」(代表者 田林 明, 課題番号 09680152)による研究費の一部を使用した。

注および参考文献

- 1) Clout, H.D.(1972): *Rural Geography: An Introductory Survey*. Pergamon Press, Oxford. 43~81.
- 2) Nellis, D.(1992): Agricultural externalities and the environment in the United States. In: Bowler, C.R. and Nellis, M.D. eds. *Contemporary Rural Systems in Transition, Vol. 1*, C・A・B International. 131~141.
- 3) 山本正三・北林吉弘・田林 明編(1987): 『日本の農村空間-変貌する日本農村の地域構造-』古今書院, 423p.
- 4) Bowler, I.(1992): 'Sustainable agriculture' as an alternative path of farm business development. In: Bowler, C.R. and Nellis, M.D. eds. *Contemporary Rural Systems in Transition, Vol. 1*, C・A・B International. 237~253
- 5) Tabayashi, A.(1996): Sustainability of rice-growing communities in central Japan. In: Sasaki, H., Saito, I., Tabayashi, A. and Morimoto, T. eds. *Geographical Perspectives on Sustainable Rural Systems*. Kaisei Publication, Tokyo. 224~240.
- 6) Smit, B. and Smithers, J.(1993): Sustainable agriculture: interpretations, analyses and prospects. *Canadian Journal of Regional Science*, **16**, 499~524.
- 7) J.クラットン・清水雄次郎訳(1997): 『馬と人の文化史』東洋書林, 285p.
- 8) 山本一生(1995): 『競馬学への招待』筑摩書房, 238p.
- 9) 北海道日高支庁農業振興部(1996): 『ひだかの農業, 1996』北海道日高支庁, 45p.
- 10) 新藤賢一・岩崎 徹(1979): 軽種馬生産の展開と農業構造の変貌 -日高地方における軽種馬生産の研究(1)-. 経済と経営(札幌大学経済学会), **9**(3・4), 23~79.
- 11) 新藤賢一(1980): 軽種馬産地帯の農業経営と土地利用の変化 -減速経済への移行期を中心に浦河, 静内を事例として-. 北海道地理, **54**, 1~14.
- 12) 新藤賢一・岩崎 徹(1979): 種牡馬の所有形態としてのシンジケート -日高地方における軽種馬生産の研究(2)-. 経済と経営(札幌大学経済学会), **10**(2), 1~65.
- 13) 新藤賢一・岩崎 徹(1980): 産駒取引の実態と問題点-日高地方における軽種馬生産の研究(3)-. 経済と経営(札幌大学経済学会), **10**(3), 1~70.
- 14) 新藤賢一・岩崎 徹(1983): いわゆる「育成問題」について -日高地方における軽種馬生産の研究(4)-. 経済と経営(札幌大学経済学会), **14**(1), 31~78.
- 15) 岩崎 徹・新藤賢一(1983): 軽種馬における「生産過剰」の構造 -日高地方における軽種馬生産の研究(5)-. 経済と経営(札幌大学経済学会), **23**(4), 71~98.
- 16) 増井好男(1994): 軽種馬産駒取引の構造 -その実態と問題点-. 農村研究, **79**, 32~43.
- 17) 新冠町史編さん委員会(1997): 『続新冠町史』新冠町, 1398p.
- 18) 新藤賢一・岩崎 徹(1979): 前掲10), 30~67.
- 19) 新冠町史編さん委員会(1997): 前掲17), 5~7.
- 20) 新藤賢一・岩崎 徹(1979): 前掲10), 27~29.
- 21) 浦河町史編纂委員会(1966): 『浦河町史上巻』

- 浦河町役場, 844~845. 923.
- 22) 新冠町史編さん委員会 (1997) : 前掲17), 272~ 278. 24) 静内町企画経済部企画課 (1993) : 『北海道静内町町勢要覧1993』静内町役場, 34p.
- 23) 浦河町史編纂委員会 (1966) : 前掲21), 920~

Regional Structure of Race Horse Breeding in the Hidaka Region, Hokkaido

Akira TABAYASHI

Gambling on horse race is one of the most popular recreational activities in Japan, and more than 16 million people head for the races each year. About 80 percent of race horses in Japan occur in the Hidaka region of southern Hokkaido. The Hidaka region has an area of 4,800km², equivalent to a medium-sized prefecture in Japan, but it only has a population of 89,936 in 1995. This study first explains the development of the race horse industry and the regional differences in race horse production in Hidaka. It then examines the physical, economic and social bases surrounding the development of the race horse industry. It further analyzes types of race horse farms, and the structure of the regional system based on horse race production.

Since the end of the 19th century Hokkaido had been an important place for producing war horses, but race horse production was mainly in the Kanto and Tohoku regions. The race horse industry in Hidaka really started to develop just after World War II, and Tohoku and Kyushu had still more breeders in the 1950s than Hokkaido. In Hidaka the number of breeders grew dramatically during the period of rapid economic growth in the 1960s and early 1970s.

According to the distribution of race horses and race horse breeders in 1995, there are three important sub-regions in Hidaka; Monbetsu, Niikappu-Shizunai, and Urakawa-Mitsuishi. These regions extend along one or two main river valleys, and are core agricultural regions consisting of rural communities with strong dependence on race horse production. Not only agriculture but all other economic activities are focused around the horse industry in Hidaka.

Hidaka extends from the gentle western slope of the Hidaka mountains, the main range in Hokkaido, and the source of more than 30 rivers. Gently sloping land covered with thick volcanic ash is not suitable for ordinary field crop production, but it is preferred for raising livestock. The climate of the Hidaka region is rather mild with little snow. The water and soil contain a high percentage of lime, which is excellent for raising horses as it helps generally a strong bone structure in the animals. Thus, the natural environment is generally suitable for the race horse industry in Hidaka. In terms of the area's horse production history, a government horse office and experimental farms opened in the Meiji era have long played an important role in developing this region as the leading race horse production area in Japan.

The pioneer's tradition of opening up Hokkaido has encouraged farmers to raise horses which may earn enormous money if they are lucky. They always dream of winning the jackpot.

Although there are various types of race horse farms in Hidaka, we can generalize them into three categories. The first type is the large-scale industrialized farm which breeds stallions and is mostly operated by the private companies or farmers' cooperative. About 30 farms are classified under this category. The second type is the large-scale producing farm which has special breaking in and training facilities for race horses. This type of farms numbers about 130 in Hidaka, and the number is increasing. The third is the producing farm which keeps mares for race horse production. About 1300 farms fall under this category. About half of them specialize in breeding thoroughbreds. Most of them are large to medium scale farms with 10 or more breeding horses. About 45 percent are small to medium scale farms raising thoroughbred and Anglo-Arab varieties. Smaller farms of this type are also involved in rice or vegetable farming. The remaining 5 percent are small scale Anglo-Arab farms with less than five horses. They are family farms breeding horses while undertake other farming activities. At present some of the large-scale farms and most medium-sized farms are not economically viable.

Race horse production plays an extremely important role in the local economy. It is not too much to say that the race horse industry is the nucleus of Hidaka's society. Owing to the limited economic activities in Hidaka, many people are involved in race horse production and related businesses such as fodder suppliers, horse transporters, horse insurers, and veterinarians. The race horse industry is strongly related to the local economy, society, politics and administration. Local commerce is mainly supported by stud farm owners, their employees, race horse buyers and visitors to farms. Tourists visiting stud farms spend much money at souvenir shops, hotels and restaurants. Horse manure is used for mushroom production and vegetable growing in Hidaka.

Since Hidaka is similar to a single-industry resource-based town, society itself has deeply depended on the race horse industry. The biggest problem is that the race horse industry has been severely influenced by the fluctuation of the whole Japanese economy. During the period of rapid economic growth from the 1960s to the early 1970s and during the bubble economy in the early 1990s, too many farmers got involved in raising race horse, and about 70 percent of them are in poor financial shape. About one third of present stud farms are just about to go bankrupt.

In order to improve conditions in Hidaka, it is necessary to reduce the number of stud farms, especially poorly managed operations, improve the quality of care and training techniques, and change breeders' money-oriented, speculative attitudes. It is also important to diversify the economy of this single industry area. Proper land-use planning also essential to preserve the natural environment: rice growing should take place in the low alluvial plains, pasture or fodder growing in diluvial plains and hilly land, and forested areas must be preserved. Breeding race horses is a suitable industry for Hidaka, and the Japanese government should help to increase its sustainability.

Key words: Hidaka region, race horse, sustainable development, regional structure, rapid economic growth



写真1 静内川流域平野（1996年8月撮影，以下写真12まで同様）。
日高山脈から南西方向に流れる静内川と新冠川の流域は、日高地方の軽種馬生産の中心である。1872年に設立された新冠御料牧場が、この地域の軽種馬生産に大きな影響を与えた。



写真2 丘陵地の軽種馬牧場
日高地方には多くの河川とその沖積平野が発達しているが、河川と河川の間は丘陵地に画されている。そのような丘陵地も牧場や牧草畑として利用されている。

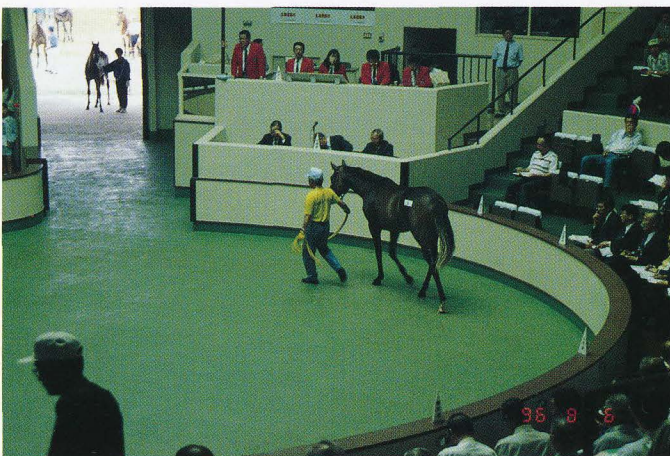


写真3 日本軽種馬協会の主催による北海道市場の開催
静内町にある北海道市場では、サラブレッドの2歳馬の6月・7月特別市場、サラブレッドの8月市場、アングロアラブ2歳馬の9月市場、アングロアラブ2歳馬の10月市場と、年間5回、延べ16日間にわたってセリが行われる。



写真4 民間の種馬場

日高地方にはおよそ30の種馬場があり、種馬をもち種付けを行っている。写真は静内町にある民間の種馬場。



写真5 育成牧場

育成と基礎的な調教を行う牧場で、屋内トレーニング施設をもっている。最近このような牧場が増加してきており、調教のために外国人を雇用することが多い。



写真6 中規模生産牧場の厩舎

浦河町にある繁殖馬15頭を有する中規模育成牧場。1962年に酪農を軽種馬生産に切り換えた。所有地は平地が30ha、山林が40haである。家族労働は4人であるが、このほかに3人を周年雇用している。



写真7 小規模生産牧場の厩舎
 アングロアラブ5頭, サラブレッド1頭の繁殖馬を所有する小規模育成牧場。6haの放牧地の外に1.6haの水田を経営しており, 3人の家族労働力のみで経営している。収益性は高くないが, 経営は安定している。



写真8 競走馬ふるさと案内所
 静内町にある北海道市場に併設されている競走馬ふるさと案内所。ここでは有名馬の繁殖牧場の紹介や馬に関わる行事や祭の案内, 宿泊施設・交通機関の案内, 乗馬施設や乗馬クラブの紹介, その他軽種馬にかかわる資料・データサービスを行っている。



写真9 アーリーアメリカンスタイルの中心商店街
 静内町のメインストリートであるみゆき通りの活性化事業として, 1984年から本格的に着工され, 牧歌の町のイメージに合わせている。全体の色調は, 日高山脈の雪を表すホワイト, 太平洋のブルー, 桜並木とサケを表すピンクの3色をベースとしている。

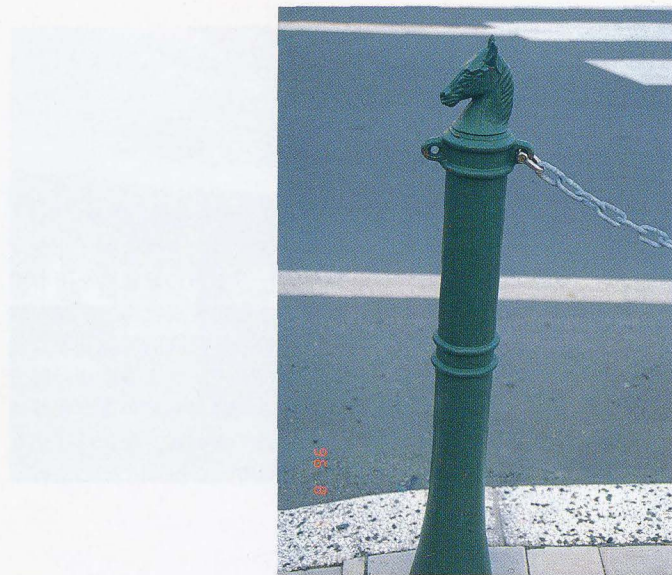


写真10 静内町における歩道のボラード

日高地方の各町をまわると、いたるところに馬と関連づけた施設がみられる。この歩道のボラードも馬の町をアピールする1つとなっている。



写真11 馬をあしらった街灯と軽種馬輸送車

浦河町でも市街地再開発が進められているが、ここでも軽種馬が一つのテーマとなっている。街灯には馬があしらわれており、そこを独特な軽種馬輸送車が走る。



写真12 シンザンの追悼式

1996年7月に35歳で大往生したシンザンの追悼式が、浦河町で盛大におこなわれた。地元の軽種馬関係者をはじめ有力者がほとんど出席し、さらに全国から競馬ファンが駆けつけた。